

「児童の世紀」を振り返る

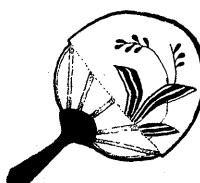
その八

本田 和子

アリエス・ショックをめぐって

状に不安を抱き始めた人々の間に、より広範囲に広がつていったというべきであろう。

Ph・アリエスの登場は、子どもをめぐる知の世界に一種の衝撃をもたらした。ただし、前回も触れたように、この衝撃が引き起こした波動は、子どもと直結した「教育」の世界ではなく、子どもの現代からの仲間たちで結成した「ムチ（無知）の会」



という自主ゼミでは、一九六〇年代にアリエスをテクストに取り上げていたとのこと。プロン社版でアリエスの『アンシャン・レジーム期における子どもと家族生活』を購読したというから、着眼点の早さは瞠目に値する。しかし、アリエス的発想が子ども観の更改を示唆する新しい流れとして、大きく浮上してくるまでには、少なからぬ時間が経過している。とりわけ、それが、「教育を考える一つの視点」として認証されるためには、現在でも、なお、いささかならぬ時間不足が指摘されるかも知れない。

因に、外国の事情にさほど敏ではない私など、アリエスの論稿に直接触れるには、一九七〇年の英語版の出現を待たねばならなかつたのだが、ただ、あるとき先のメンバーの独り為本六花治の論稿に触れて、「オヤ」と目を見張られた記憶がある。確かに、学校教育に関する一節のなかに、学校を近代の

生み出した「閉ざされた制度（エンクロージャー）」と位置付ける見解があつて、それが、私の目を引いたのであつた。学校教育と言えば、「学校」という存在そのものは自明として、中味への言及のみが跋扈していた当時にあって、「学校」を近代の生み出した一種の装置とする指摘が新鮮だったのである。

この考え方は、ミシェル・フーコーに近いといふ驚きもあつた。監獄や病院など、異質の他者を囲い込むための多種多様な制度の産出から近代を論じたミシェル・フーコー的思想が、教育の世界にも適用可能かという発見もある。やがて、アリエスのこの論稿は、一九七〇年に『児童の世紀 (CENTURIES OF CHILDHOOD—A Social History of Family Life—)』という英訳本として世に問われ、アメリカ合衆国で大きな話題を呼んだ。以後、本国のフランスでも改めて再評価の気運が起ころる。

そして、従来は、大学の教職を持たなかつたこともあつて「日曜歴史家」などと呼ばれていたアリエスが、アナール派歴史学を代表する一人として社会科学院の主任研究員として招聘されるなど、彼自身の学者としての位置付けも大きく変化したことは周知であろう。ということは、今世紀の後半に至つて、時代がアリエス的思考を必要とし始めたということである。

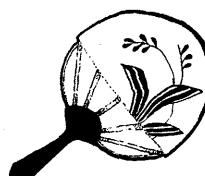
一九七〇年代は、アメリカ合衆国における子どもや若者の反乱の季節であり、校内暴力等に手を焼く関係者たちが、子どもに対する「まなざしの更改」を迫られていた時期でもあつた。「なぜ、私たちには、いまの子どもが見えなくなつてゐるのだろう」と「私たちの子ども観は、もはや破綻の危機に瀕してゐるのではないか」、こんな思いに押し潰されそつな関係者たちのなかで、「子どもとは時代のまなざしの所産である」とするこの見解は、子どもの世界

への新しく開かれた「窓」として受け止められたのでなかつたろうか。

わが国におけるアリエス・ショックは、アメリカ合衆国よりも一〇年遅れの一

九八〇年代に訪れている。このことは、わが国の人間事情が合衆国のそれに比して、おおよそ一〇年は安泰であったことの証しとも言い得ようか。確かに、私どもの周辺で「子どもが異星人のように見える」などという声がしきりとなり、親や教師たちの間に従来の大人—子ども関係の解体が囁かれ出したのは、一九八〇年前後だったのである。

しかし、先に触れたように、アリエスによって提起された問題は、子どもと直結した教育界には直接的に影響せず、むしろ、広く知の世界全般に波及して様々な論議を呼び起こした。たとえば、日本教育



学会のシンポジウムの席上で、教育史学者中内敏夫は、教育史の新視点というかたちで、アリエスを踏まえた問題提起を試みている。しかし、フロアから格別の応答もなく反響が薄く見えたことからして、斯界におけるアリエス・ショックはさほどものではなかつたらしい。それに反して、いち早く言及したのが哲学者の中村雄二郎であつたように、こぞって反応を示したのは思想界のオピニオン・リーダーたちであった。柄谷行人の「子どもの起源」に関する論稿は、優れてアリエス的でもあつて、脱近代的思想を摸索する若者たちに反響を巻き起こしたことは先に触れた。結果として、わが国のアリエス・ショックは、こうした不思議な形でその波紋を広げて行くことになる。そのゆえに、「いま、△子ども」という言説も／＼は、アリエス抜きでは語り得ない」という意味はある面から見れば真実と言い得るが、別の面からはずしも真実とは言い難い。

なぜなら、このことは、子どもが単なる教育やケアの対象であることから脱して、「子ども」という存在そのものの意味において語られるようになつたことと連動している。すなわち、真に向からアリエス・ショックを受け止め、まなざしの更改によつて「子ども」を捉え返そうとする試みは、主として後者の立場、すなわち、「子ども」を意味的存在として語ろうとする人たちのものであり、前言は、これらの人にとってのみ真実だったからである。

子どもをめぐる心性と社会の歴史

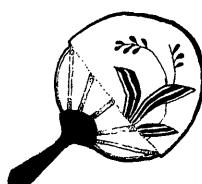
私どもの眼前に佇む「子ども」とは、単なる生物的存在としての未熟な肉体の持ち主ではなく、「純真・無垢」あるいは「子どもらしさ」、さらには「発達可能態」とか「未来指向性」などという様々な意味に染められた社会・文化的産物に他ならない。そして、彼らの肉体にそれらの意味を染め付けるの

は、個々人の子どもも観を越えた「時代のまなざし」とでも言うべきものであろう。現在の子どもが、私どもに見えなくなりつつあるとすれば、そのまなざしが破綻しかけていることを意味する。となれば、この「まなざし」の生成の過程を見定め、それに固執することの愚を改めて、新しい視力の獲得を望むことこそ肝要ではないか。

アリエス・ショックの生産的な帰結は、おおよそ、以上のように要約可能だろうか。アリエス以降、新しい視点からの「子ども史研究」が活性化したのは、このことの見える形の結論とも言い得る。歐米諸国で、十七、八世紀に視点を合わせた子ども研究が続出するのも、このことを証しする例である。しかも、アリエスのもたらしたものは、「子ども」の暮らしの実態を明らかにするにまして、彼らに注がれた「まなざし」を跡付けるという、その視点であり、「子どもとは、時代の心性の所産であ

る」とするそのテーマで
あつたから、アリエスに触
発された研究は、このテー
ゼを是として、より厳密に
それを検証しようとするも
の、すなわち、アリエスが
捨象した特定の地域や階層に関して詳細に「子ども
発見」の軌跡を辿ろうとする研究と、批判的立場に
立つて、十六世紀以前に時代を遡らせつつ「不变の
子ども観」を抽出しようとする試みに二分された。

さらに、活況を呈したのは、「青年」や「家族」
に関する同様の視点からの検証である。歐米諸国に
出現した「青年」もしくは「青年期」という概念の
誕生を跡付けた多くの研究や、ドイツ、イギリス、
オランダ等、政治体制と近代化の過程の異なる各国
に焦点を合わせて、「家族観・家族像」の変遷を跡
付ける試みの多出など、心性史・社会史という



ニュー・コンセプトが、子どもや若者、あるいは家族の研究に生じさせた新しい動きであった。

と、それと同時に、アリエスが活用した資料の多彩さも、関係者の目に新鮮に映じた。彼は、墓碑銘・個人の日記や書簡・肖像画・衣服・玩具、あるいは家屋の形態等、従来は民俗学資料に活用されこそすれ、歴史研究からは除外されがちであった「無名の個人の文書」や「もの資料」を多用することで、匿名の人々の歴史研究の可能性を示唆したのである。そのための資料として、正統的歴史資料たる公的文書類にのみ依拠せず、日記・書簡等の私的文書類や、図像・玩具・衣類等の物質資料、さらには、子ども部屋やそこに置かれる家具類等、従来とは様変わりした日常的諸種の遺物が活用され、子どもに注がれる時代の「まなざし」の抽出が試みられたのである。

確かに、子どもの生にかかる諸事象は、王位継承者のような特別の存在は別として、公的資料として保存される機会を持たない。女性や老人、あるいは庶民の家族も同様である。結果として、従来の歴史は、王や武将等、権力者のそれであり、彼らによって行われた政治や戦いの歴史であった。その時代を支えたであろう多くの名もなき人々、底辺を生きた多くの庶民や女・子ども・老人等は、いずれも歴史の流れの底に息を潜め、あたかも存在していないかったかの如くに無視され続けるのが常であった。これに対して、アリエスの手法は、彼らに息を吹き返させ、歴史の表層にその姿を浮かび上がらせることが可能にしたのである。

「常民の生活」という言葉で、匿名的に生きた過去の人々に視線を合わせようとする試みは、民俗学者柳田国男の嘗みでもある。古⽼の語りや残存する民間儀礼などの採集を通じて、過去に生きた普通の人々の暮らしのありようと、そこに反映された意識

・無意識を探りだし、それらを私どもの祖先の「心

意の生活」と位置付けて保存することが、柳田民俗学のねらいだったのである。

ことは、アリエスに限られない。「教会の鐘」と「広場の時計」を手掛かりに、新しく勃興した市場

原理とそれを支える心性を論じる企てや、ナイフや

フォーク等、食卓に置かれる食器類のありようを通

じて、中世的心性から近代的心性への変貌を跡付け
る試みなど、この時期にアナール派歴史学者たちの
提示した新動向は、過去に関心を抱く歴史学者と民
俗学者、時には博物学者も含まれることもあるが、
彼ら全体にとって刺激的であった。それは、この
両者、あるいは三者の間に、幸福な蜜月が到来する
かと期待されたのである。

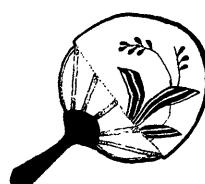
ところで、アリエスに限られないが、アナール派学者として登場した彼ら歴史学者たちは、いま、焦点化している対象は「手掛けり」であり、「切り口」

に過ぎぬと説明していた。

すなわち、「子ども」や「時計」、あるいは「食器」の変遷を実態として解明することが本来の目的ではないと言うのである。

「老い」や「死」をも主題化しているアリエスは、
このことに関して次のように説明している。すなわち、「子ども・老人、あるいは死に瀕したものたち」に視線を合わせることで、時代の表層に浮かび上がることなく、深層にたゆたい変化を遂げつつ流れ続ける人間の心性に鍵を降ろすことが出来るから、と……。

したがつて、アリエスの仕事は、「子ども」の歴史を時間を追つて忠実に紡ぎ出すことではなかつた。古い時代に子どもがどのように生き、どのように成長を遂げたかをあらわにする営みは、そのこと



自体を目的とするのではなく、そのことを通して、
当時を生きた人々の意識・無意識がどのような変遷
を迎ったかを明らかにしようとしたのである。

しかし、等しく人間の心性発掘の試みと言つて
も、対象化されるのが「子ども」である場合と「死
に瀕した人たち」とでは、自ずから違いが見られる
のは当然であろう。要するに、浮かび上るのは當
時の人々の心性に他ならなかつたとしても、そこに
クリアとなるのは「対象化されたものたちと時代と

の関係の結びよう」であり、「子ども」に限つて言
えば、「子どもと大人との関係のありよう」と見る
ことも可能である。したがつて、アリエスに触発さ
れて明らかになつたのは、「子どもの歴史」とは、
つまりところ「子どもと大人との関係の歴史」以外
にはないということだったのである。

江戸研究と「子ども」との出会い

わが国の場合、「子ども」を直接の対象とする研

究者たち、たとえば発達学者や教育学者がその代表
例であるが、これらの人たちの間でアリエスの直接
的影響は薄く、家族史研究の活性化に比して、子ど
も史研究にさほどの動きは現れなかつたかに見え
る。とは言え、先に言及した中内敏夫のグループ
や、「子どもと大人の関係史」構築を志向していた
宮沢康人のグループでは、従来と異なる新視点に
立つた「子供史・教育史」の研究が軌道に乗り始め
ていた。

一方、同じ時期に、新しい「江戸研究」が蠢動し
始める。すなわち、「江戸」という時代が、従来、
定説化されていた封建的・抑圧的な暗い時代ではな
いという発見である。都市町人階層は言うまでもな
く、底辺の庶民層や女・子どもの上にも、また、彼
らが形成する小さな家族の上にも、変化の兆しが見
いだされるのだから。そして、彼らが、徒に土農工
商の身分階梯に呪縛され、武士階層の制圧の下で息
を殺して生きていたわけではなかつたという、新知

見が提示されたのである。

この動きは、外国、とくにアメリカ合衆国の歴史

学者らに触発されて起つた。彼らは、西欧諸国が

領土や王位継承の争いに明け暮れている同じ時代

に、島原の乱以降、一度の内乱もなく三〇〇年にお

よぶ平和を維持して、庶民層に安定した生活を保証

した徳川体制に新鮮な関心を寄せたのである。結果

として、偏見のない江戸研究が積極的に推進され

る。江戸の前半期に増え続けた人口が、どのように

して維持されたのか、旱魃や洪水など度重なる自然

災害は、どのような治世で切り抜けられたのだろう

か。さらに、徐々に進行する文字情報の時代に、庶

民はどうな適応手段を講じたというのだろう。

そしてまた、三〇〇年の泰平は、どのような文化を
生み出したのだろうか。改めて振り返るなら、わが

国の十七、八世紀は、このように、知的関心をそそ
られる題材に事欠かない。こうした異国の研究成果

に活性化されて、わが国の

江戸研究が俄に新しい様相

を呈し始めたのである。

それら江戸研究の一環と

して、アナール派の特色の

一つでもあつた人口動態を

鍵概念とする研究が浮上し、それに触発されて人口

の増減と子ども観の変貌も主題としての位置付けが

明確化する。その結果、従来は民俗的事項として扱

われていた「間引き」の問題などが、幕藩体制下の

人口政策を伺い知る手掛かりとされ、また、小児疾

患への対処法が医学の発展を垣間見る格好の話題と

される。その結果、子ども関連諸事象が、江戸を解

明するための史的課題たり得ることが認識されたのである。

具体的に例を上げよう。「間引き禁止」を告げる
通達が頻出し、あるいはその不道徳性を糾弾する啓



蒙文書類が市井を徘徊するのが、江戸後期であるが、これは、農村人口の減少防止が政治課題として浮上してきたことを意味する。また、流行する天然痘への対処が、「疱瘡神」を祭ることから予防的に薬草を使用する形へと変化する動きは、療法そのものは非疫学的ではあるが、疾病への対応が呪術から医術へと推移し始める心性の変化を指示するだろう。かつて、村落共同体への加入儀礼であつた新生児の「氏神参り」は、江戸後期には、単なる子ども成長祈願へと変化を遂げる。この経緯が物語るのには、村落共同体が崩壊し、それまではその絆のなかに安らいでいた人の一生が、家族という小さな単位に委ねられ不安定に揺らぎ始めていく過程を物語るものと言えよう。

こうして、江戸研究は、思いがけず、十七、八世纪の子どもに注がれたまなざしを浮上させ、逆に、それを鍵として、江戸後期の時代的心性を垣間見せ

る結果を導き出した。一九八〇年代後期に、民族学博物館、歴史民俗博物館等の研究機関が相次いで子どもを主題とするプロジェクトを組み、史的・民族学的視力によつて「子ども」を追跡すること企てたのは、こうした動向の現れと言えよう。

しかも、この「江戸研究」と「子ども研究」の提携は、先のアリエス・ショックの残存効果の一つでもあつた。すなわち、直接的にアリエスを継承あるいは追試するのではないか、彼の提示した「子ども発見」のテーマを下敷きとし、わが国流に近代的な「子どもの誕生」を跡付けようとする試みでもあつたからである。

(聖学院大学)